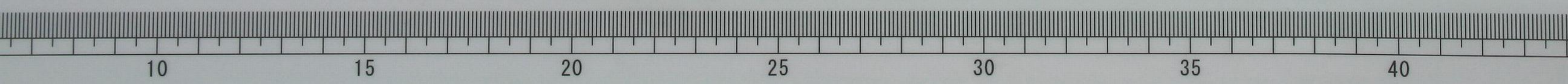




永島孟齋画

藤田仙果録

藻汐草近世寄談





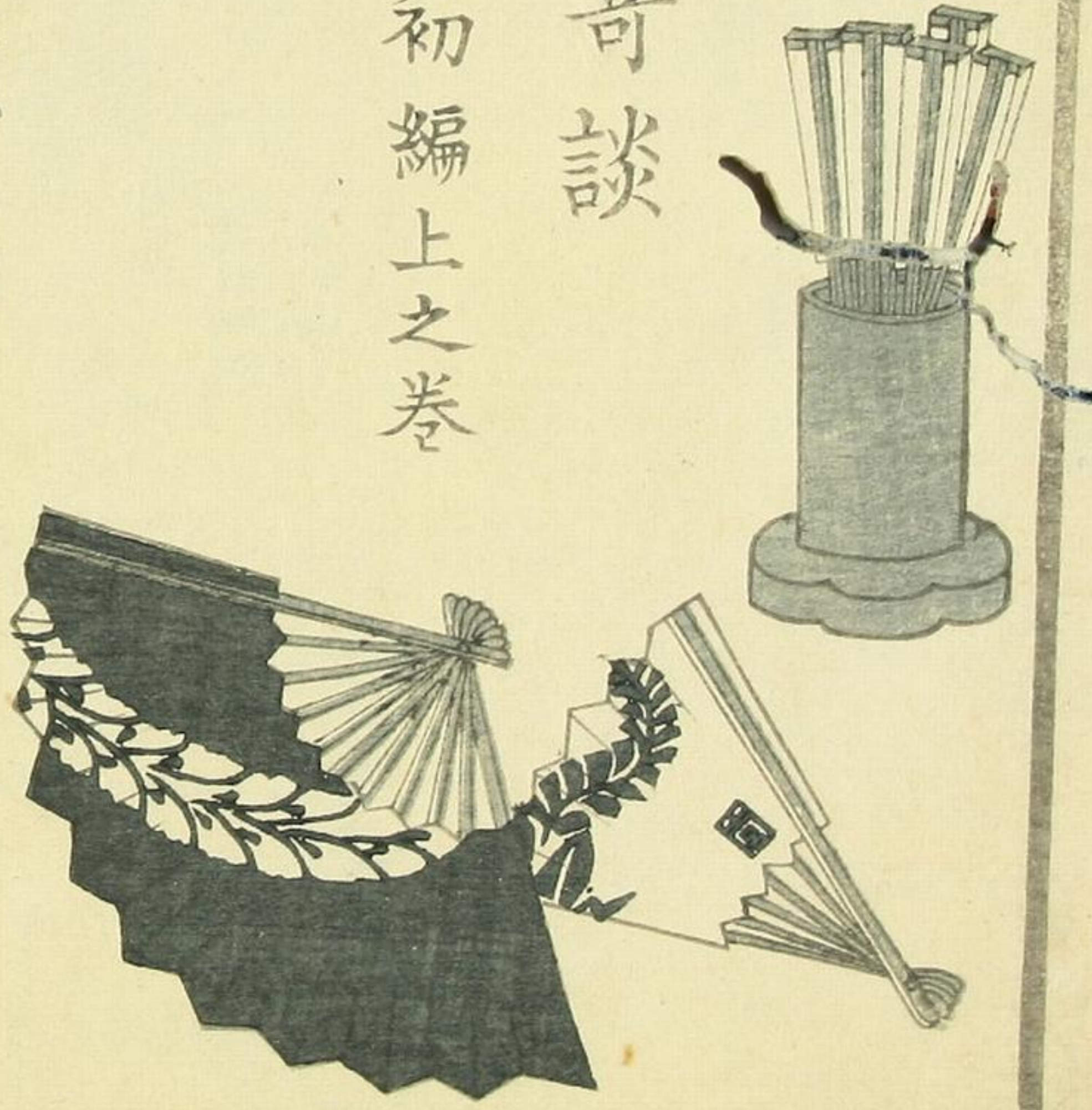
澡汐草

近世寄談

初編上之卷

篠田仙果録
永島孟齋画

青盛堂梓



虎峯画

世の中三日にね間にさくら川古跡の數あり
 猫が住む三味線堀に雑子の小屋あり。御殿山子山
 めきし所あり。深川又川堀割て増せり。時世の變遷豈
 俳優の早變りに異ならずんや。文場の戲墨もまこと然り。
 むし其往昔古有さ土佐繪の古風と廢り。親和の篆書新奇と
 愛む草双紙の趣向又於るや黄表紙の滑稽其色と共に其の覆討
 流行せしが其後奇術の賦話も。柯空と論じて幼雅衆も手にしるべ。
 依て繪入新聞の内人情の箱田の大人か妙筆と抄録為りの内
 月兔泥龜池の湖轉人 竹條田仙果





大工棟梁
福引市造

美石の抱え
藝妓若國

大工棟梁



東京
仕入小間物品々

松下安次郎

藤岡の養女
於秀

藤岡の養女

○幸問屋久吉



於秀の養母
六日不知の救直

藤間王

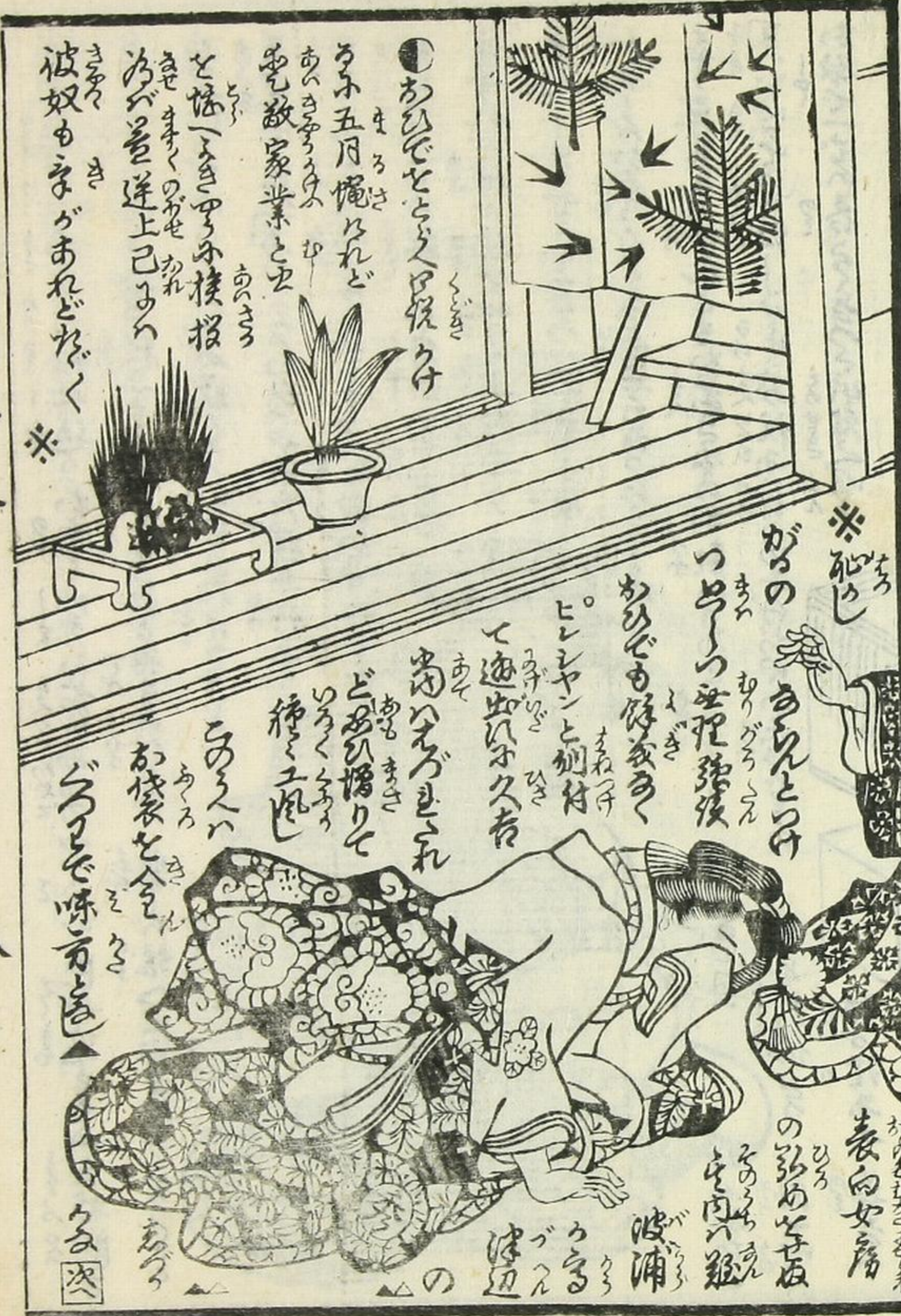
藻汐草近世奇談上

○男女との壯き折檻しむべし
着に生涯を過まると老あまらば
近以楊柳の浪花をく風と懐
たる仇殺のあま法や律の
かゝる程ふ辛万苦せし法を拙も



□解出はんと
大坂府下梅橋
の末に菊信小
の強歸
の掃菊

▲よる者あり
火へ



●おひでととらえは後うけ
 る不五月俺れれど
 あいさううけの 中
 忠告家業とと
 とはくまのやうな様扱
 きまのながせおれ
 ながさ運上己の
 彼奴もまがあれどなく

※恥じ
 かの あんといけ
 つとらにせは強後
 おひでも好まろ
 ヒレヤンと別村
 て逃出い久者
 あいのちがとこれ
 どおの増りて
 種々工風
 この入の
 お袋を合
 ぐらつを味方と

表向女房
 の恥めとせぬ
 を内へ組
 波浦
 うる
 づん
 の
 うま



おひでととらえは後うけ
 せんと成日
 お連のと連て
 三休の料
 だ茶屋二景
 播のるふあ
 酒派ま一後子
 ふそんおひでの
 るを公世お
 が承知て直
 バ合ふ名用ハ
 せもつねぬ

おひでととらえは後うけ
 せんと成日
 お連のと連て
 三休の料
 だ茶屋二景
 播のるふあ
 酒派ま一後子
 ふそんおひでの
 るを公世お
 が承知て直
 バ合ふ名用ハ
 せもつねぬ

久き
合等りほ

後同藤本に

己ま別

の車もそはらう

静お引せる

久きへ浮眠の如く

又もあつこゝ致致車よ

あゝそのはらひ致致をりの迦出

ふのちも車の中息ふらひ世ん地

して一ト縮こまりて居り内車が

止るふんづきうしく足ねが我が門に

ホツと一息つくるものもあつり引け



くけり姉の執事そは

はらうはらうトタ

入る久きおまのまき色

はらうやまや久きん

ホツと一息つくるものもあつり引け

○代言人真狩文治

藤間の裏口まで

内の中つま

伺ふふら後の

巻に委

薄沙草近世奇談

初編より

引續出版

松飾徳若譚

六編より

追て出版

今朝の春三組盃

三編より

追て出版

御届

明治十一年十二月十七日

神田區仲町二丁目六番地

編輯人 篠田久次郎

日本橋區米沢町一丁目七番地

出版人 堤吉兵衛

東地本錦繪問屋

010190510480





①か金をさる世とて
か肉が不足尾とあり



つぎ母さん病
飲まぬ私いふと

杏ろりま
お茶の
んの内由

れどあ云出ーと
上うのハイと返

りせぬあい
はれいふると

お茶をさる
地へ娼妓小

きさるのい必
定むれが後の

実の母
久

中放我候
るれと通



②か金をさる世とて
か肉が不足尾とあり

さんま
仕中
ゆめ
も

不せ使ひめて

久さんのおせ指小

とせ上で 不るお
あし侍り私

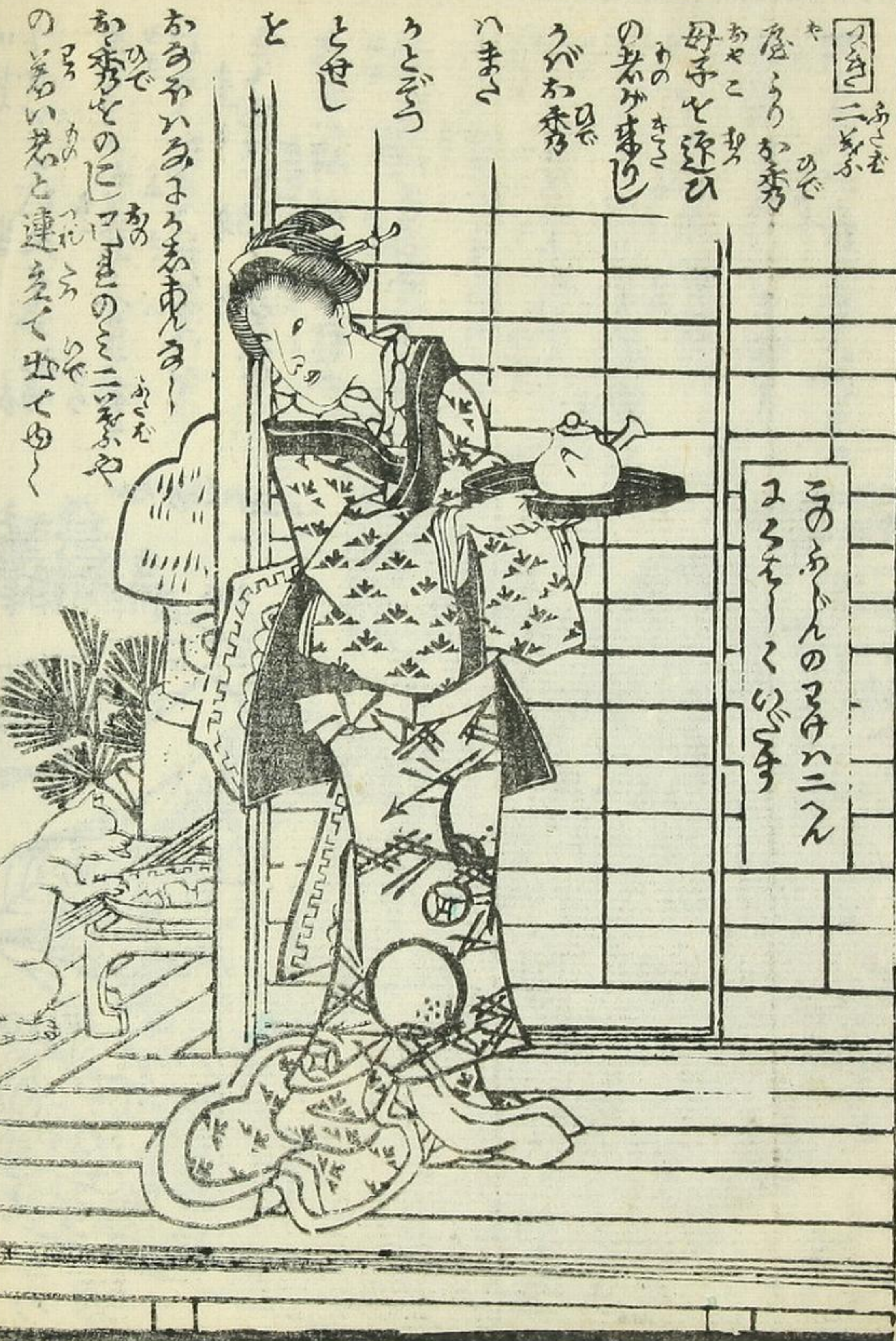
かたあすうら
必り短

とせ甘茶す小よ
も角もはるん

お湯とお湯も香
りと潤を

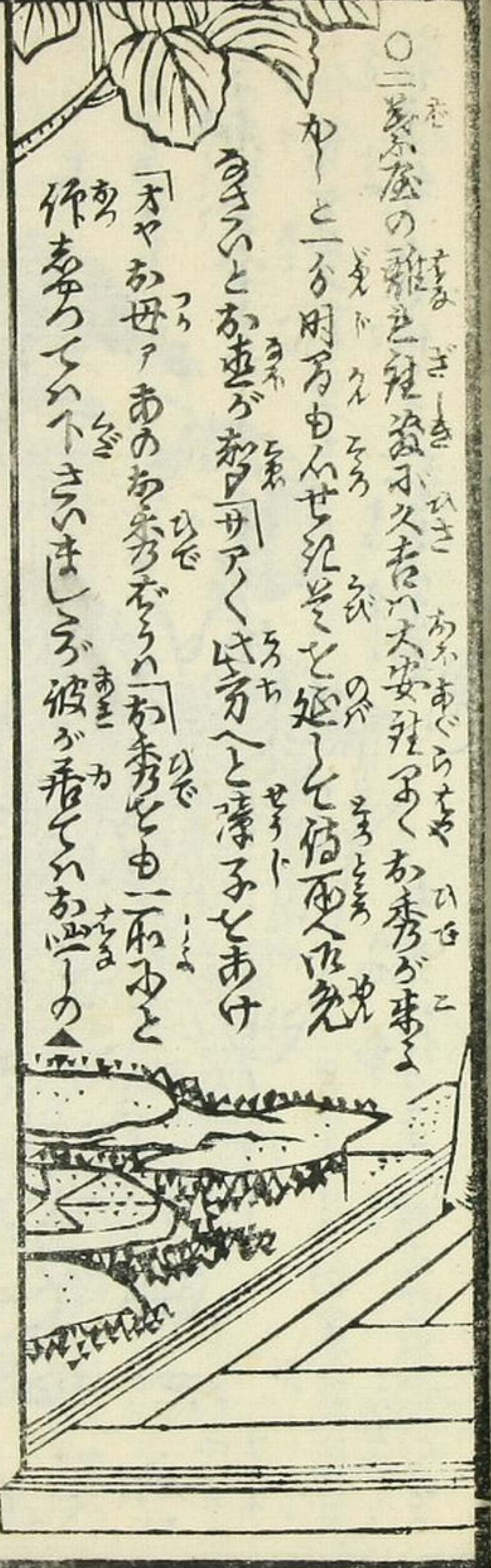
影いれを相おあ
姉くあてたふと

このあとのまの二ん
よろしくいさす

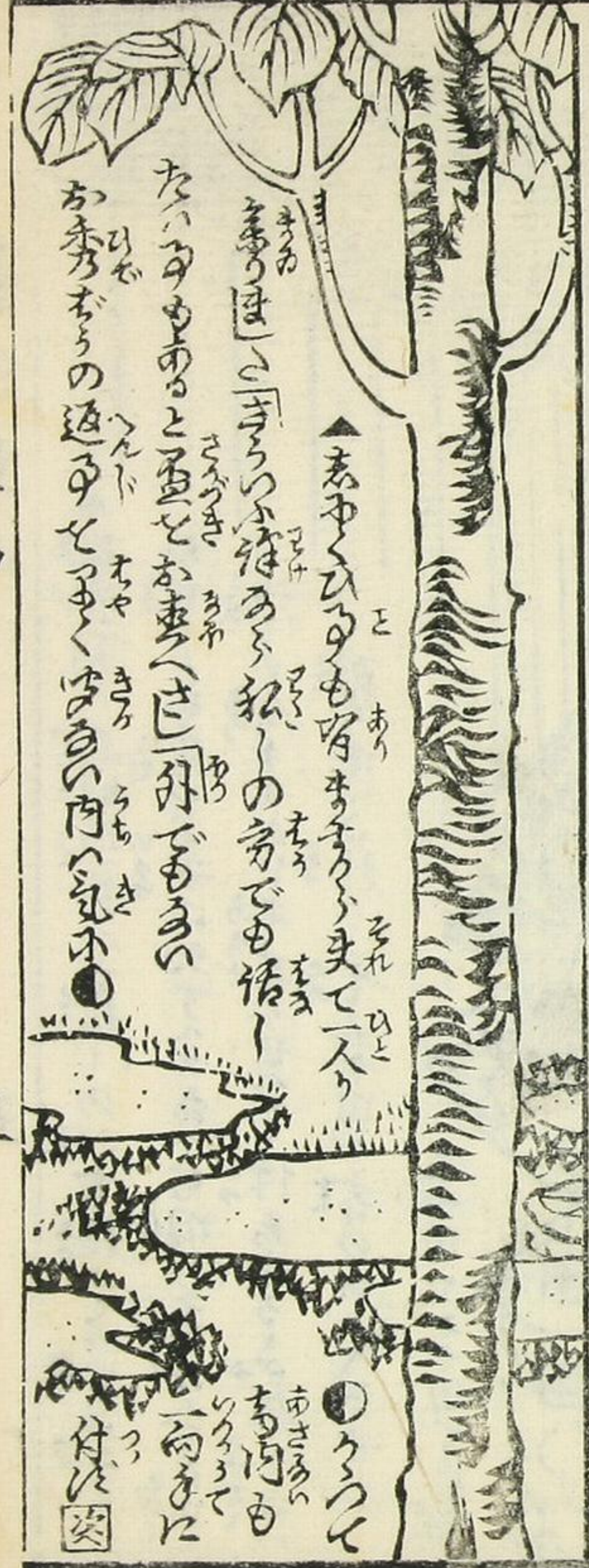


おろろいふよりあはれなり
お秀どのに口はしの二んぶや
の着い若と連えて出てゆ

つぎ 二んぶ
おろろいふ
あやこ 勢
母子と逢ひ
の若が事
うかお秀
いま
うとぞう
とせし
と



○二んぶ屋の難之短後不久若の大安狂子くお秀が来
やと二んぶ用乃由んせれきと短しと信重の短
きまるとお連が初サアくは方へと薄子とあけ
「オヤお母アあのお秀お秀ういお秀也由二んぶと
作まらて下さまは」お彼が着ていお出の



▲お中へひりも皆まきりうまで一人
まのほしにまのほしはあまのほしの旁でも信
たのりもあるとおととおまへは「お母でもあ
お秀お秀の返りてまへはあの内へお出

●うつて
あまの
まのほし
お出

▲殺出可一止形何云んま松一の詞を鑑小てる実いさる
 お方らあ秀と妻小出するあり可同のまは合とま
 後一の有ますのとま云かせつ々作あするも故そ方
 形の時一松一そ五十田か春のあり入ませぬ
 五十田や七十田ていあ秀



家と指しむお茶のあまのなるあはれ
 生流るあまのあまのさト紙幣びふと
 まられてあはれおこく候とまの「あはれ」
 中を通りあ約束を仕はさ上いあ秀あはれ
 中い中まをませぬあはれあまのあはれ
 結納の紙幣いあはれあはれあはれ
 懐中へ入まんとまをせえあはれ
 「その紙幣とお茶のまへはあはれあはれ
 互れどもあまのあまのあまのあはれ
 お互いあはれあまのあまのあはれ
 引替に仕さ方があはれあはれ
 おこれてあはれあはれあはれ

と花ご月小逢ふうもあはれあはれ
 まあろろあはれあはれあはれ
 うるは久長「それいあはれあはれ
 めまろく候とあはれあはれ
 「あまの初いか五十田とあはれ
 であまのあはれあはれあはれ
 であまのあはれあはれあはれ



薄沙草中

五



下一札を燃めて
 五十四を交
 安城區一西も
 今宵難波の狭服も
 前豆菜を遠
 おひを一つれて
 きて下されやと
 主自れをせ

夕方の光を
 交した故今夜
 台を言わぬを借よて
 仕度の手をせりさの
 うち久々の日
 の旅を
 午後五時
 の陸の香
 小を運
 せに
 せに
 せに
 せに



折合せを申
 我家へ入り
 成て若き方
 久さんの世
 今交際と
 多るおし
 別をたれ
 うにま
 とはは
 此の後のま
 りて
 別り
 せん
 先初
 久
 二
 ち
 ち
 ち
 ち

源氏物語

ついでに物敷

わきまを無理に引

こせるとお連の

見るとうらやま

外へぬれアおひ

をひきかへまると

あどとろて先ゆ

次の百本のくさ

解の上お安社を

解志あくまある

おひての表一さ

き仇一男お孔あ



横小きり

海鳥とてと伺ひてお

ハとと思ひ出度の枝

お戸窓の小押

下息

と

吐き

き

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

月と

ひ

あ

あ

あ



あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

葉夕草中

あ

あ





永島孟齋画

藤田仙果録





青々

文彦

とらやん

とせうの

仙果珠 初編下の

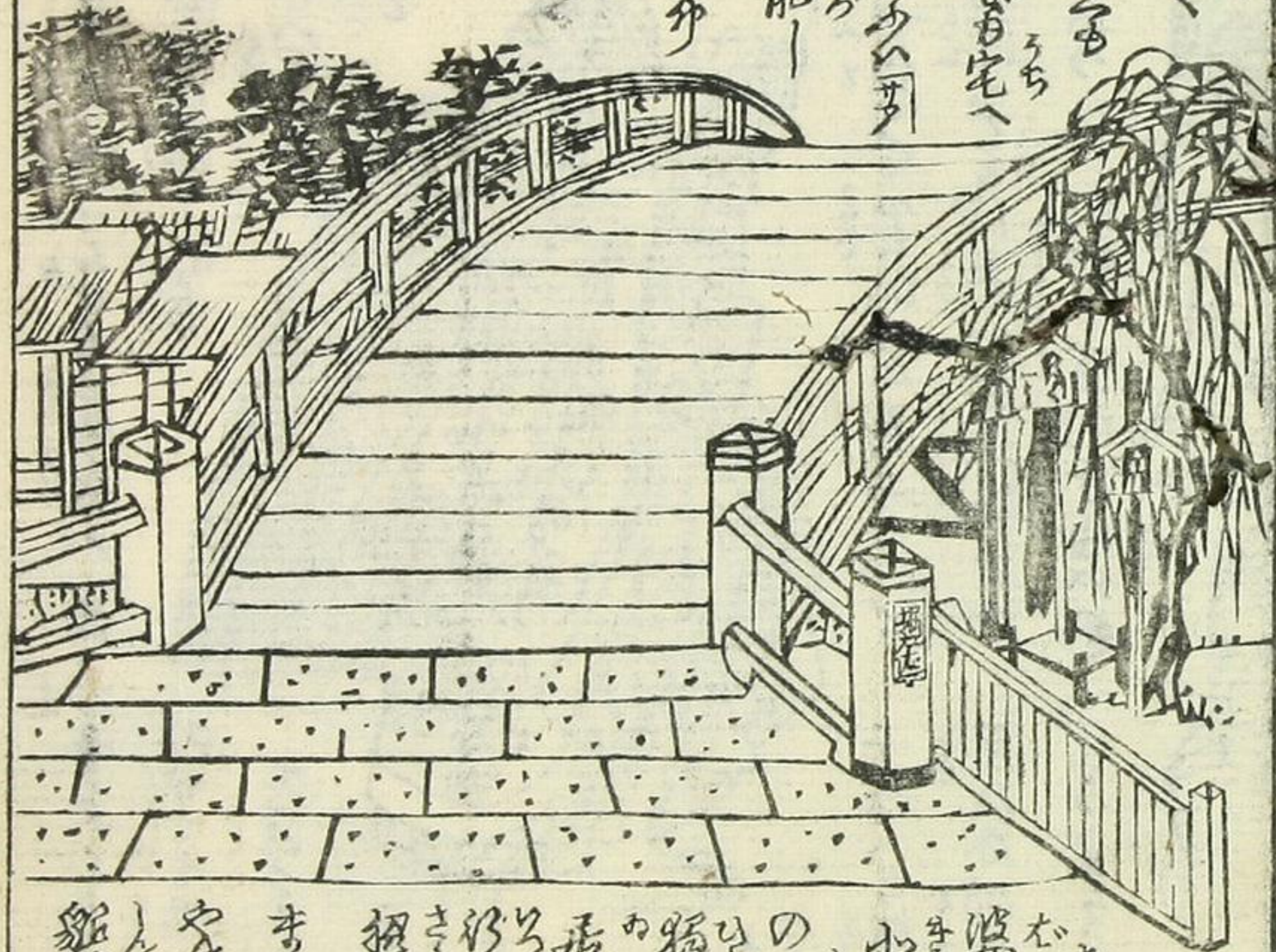
孟高志

中

庚申



申のつぎに 諸説とある程ゆゑ
室にお取りまとのれお秀の
ら世に習ふとてごのまが
へぬれません 引いて
ゆを下さの安んずるく
あつらひの舟を吐くれば
も能くとも 引いて
は後小後居るの房ら
まの儀一何と云へ
とあゆみ
途中のゆるれば
幸ひ松一が 観るよ



波のうき
水のたぢ
の下の
猫の
病の
おせうと
おせうと
おせうと
おせうと

上原

公見るおひむらうの悦喜法儀之事も御舟バ玉為まらねばあふまへ
 徹く小痛む足之麻ん死させ世と隠しても
 自然とそむ息をひき安二階へあつち
 後し懐中せし茶との百世を扱と
 列をて麻布と色とよるた内ふ
 時るゆらちおれく
 新阿又ぬりの客
 せ安世疾人か車
 のまのりーくがを世と
 程とお秀とぬ抱合来ホ
 小の形地の下系るるお虎の
 門お来りてるを世と起一

完全く笑ひ成具あえん
 二階へおびぬの安きん
 ありおれ一正財かゆの
 互ひ不澄猶惚の
 万がらるる志也
 何由

二階へと押上り
 二人りと
 由二階へ
 のかしを後しゆ
 てはさるる南



横子あるねバ
 かねてえんす
 とのりてあられと
 とをちやうけかあれが
 戸をちやうけかあれが
 初め招儀の安きん久今
 鳴るよ也あれと戸を押しけ
 二人ををて用うあけけ方へ
 おまのり今初ハ風が
 余程あつちのよを
 さむいけいま
 せう嬢さんるん小由を
 りい
 ちあいのよ安きん也あれとあしと

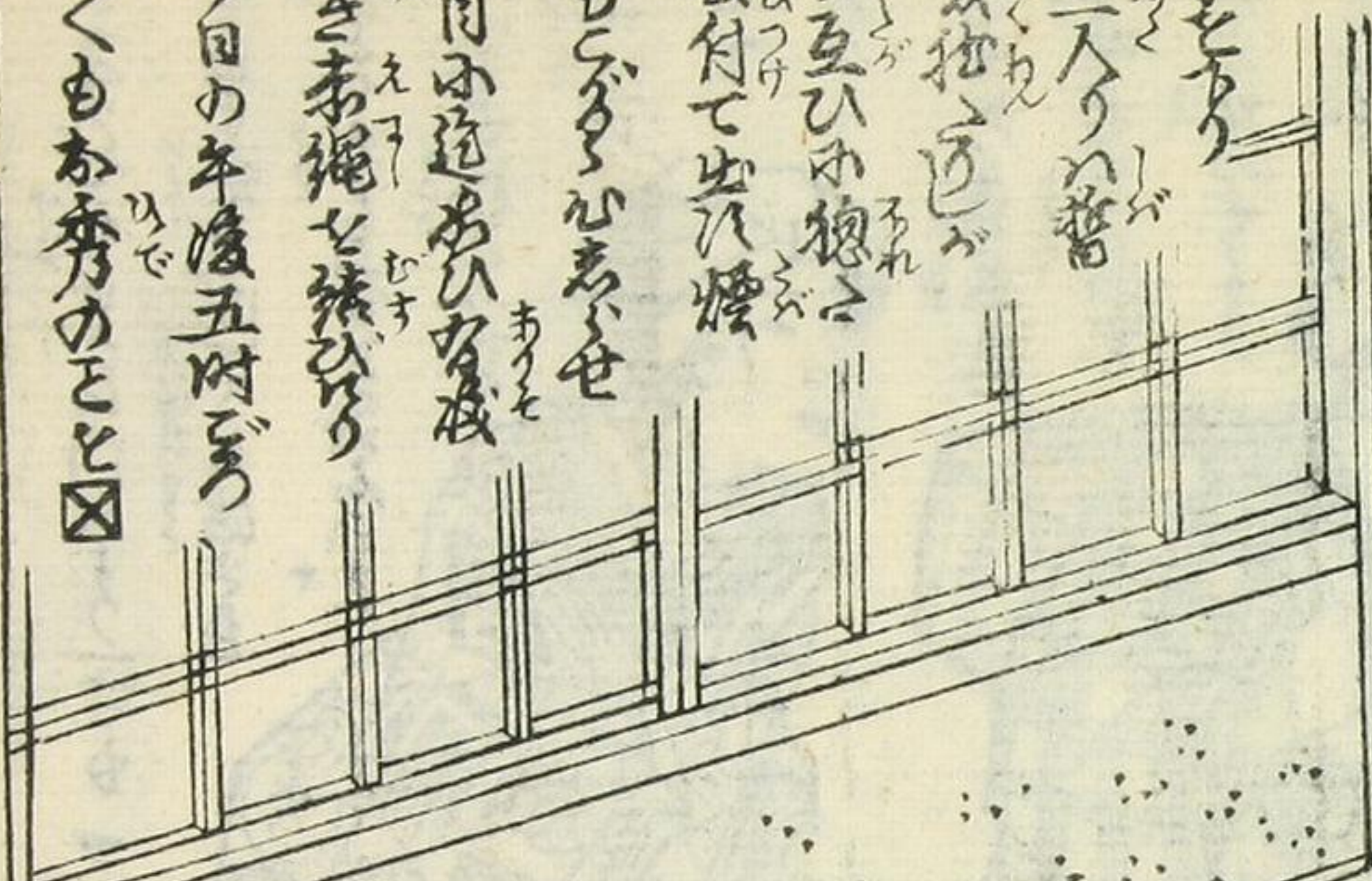
起さるるト云をてけ方ハ
 迷惑がうい正とれあハ
 が有てあつちのよおれと

ありが去
 と風邪
 と引せ
 必成
 ぬと名



真奴車下

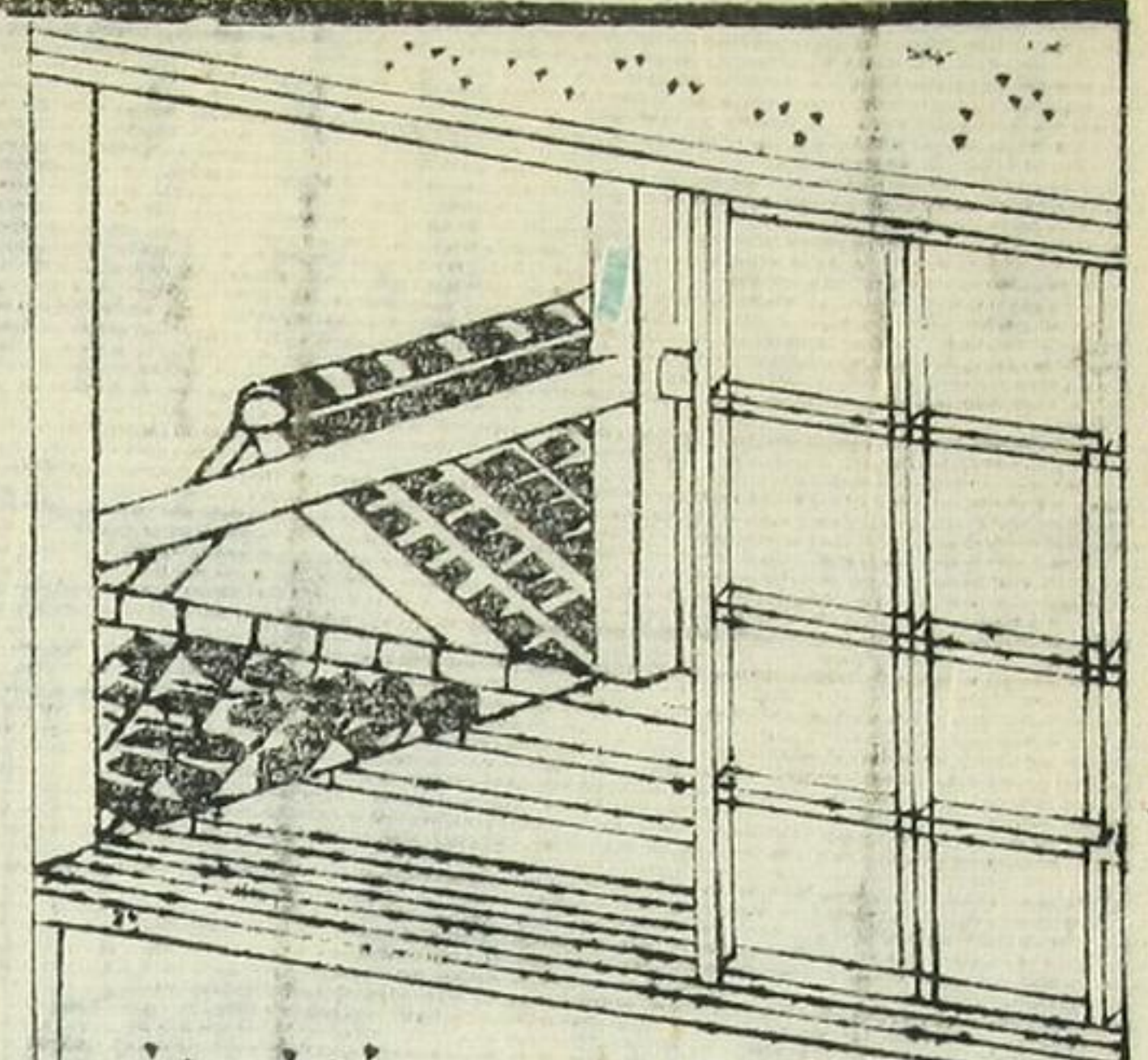
利か有るもあらずさうかまこと
 お虎
 の階子とあり
 てゆく二人のい誓
 らく嘆かすはか
 えより互ひの物さ
 同土吸付て出た煙
 兼西のふらふ心あふ世
 じと月小道あひの夜
 海津さ赤繩を結ひたり
 扱身目の午後五時
 乙且く由お秀のここと



二日一ト限りとのい
 何者まの何定ある夜
 泊り白
 となり
 世は小まぬぬ
 のとあふの上
 うまのいんを
 厄ぬぬ成て
 尻ぬぬ
 穴ッ透入
 仕表
 小



つきぬしうらふ今日
 長て藤付すしおれ夜と
 うくお為よとみまふ二人の
 煙中とあひのをたるる



妻の身入
 名根
 平ま朱
 五後
 小伯父
 疾り
 小伯父
 疾り
 小伯父

子とて今日も門にまゐる可也
 移して於てあつて
 破れや小指せり
 下方より安んず
 二個小指の
 小由未可
 ちて長
 伯父が怒つて
 姉がと内
 月夜あつて
 遠く
 今でいづれの中
 ぬおむ

○あつて今日も門にまゐる可也
 移して於てあつて
 破れや小指せり
 下方より安んず
 二個小指の
 小由未可
 ちて長
 伯父が怒つて
 姉がと内
 月夜あつて
 遠く
 今でいづれの中
 ぬおむ



友の姉さんへは
 私への好意が
 子でいづれの中
 あつて今日も門にまゐる可也
 移して於てあつて
 破れや小指せり
 下方より安んず
 二個小指の
 小由未可
 ちて長
 伯父が怒つて
 姉がと内
 月夜あつて
 遠く
 今でいづれの中
 ぬおむ

友の姉さんへは
 私への好意が
 子でいづれの中
 あつて今日も門にまゐる可也
 移して於てあつて
 破れや小指せり
 下方より安んず
 二個小指の
 小由未可
 ちて長
 伯父が怒つて
 姉がと内
 月夜あつて
 遠く
 今でいづれの中
 ぬおむ



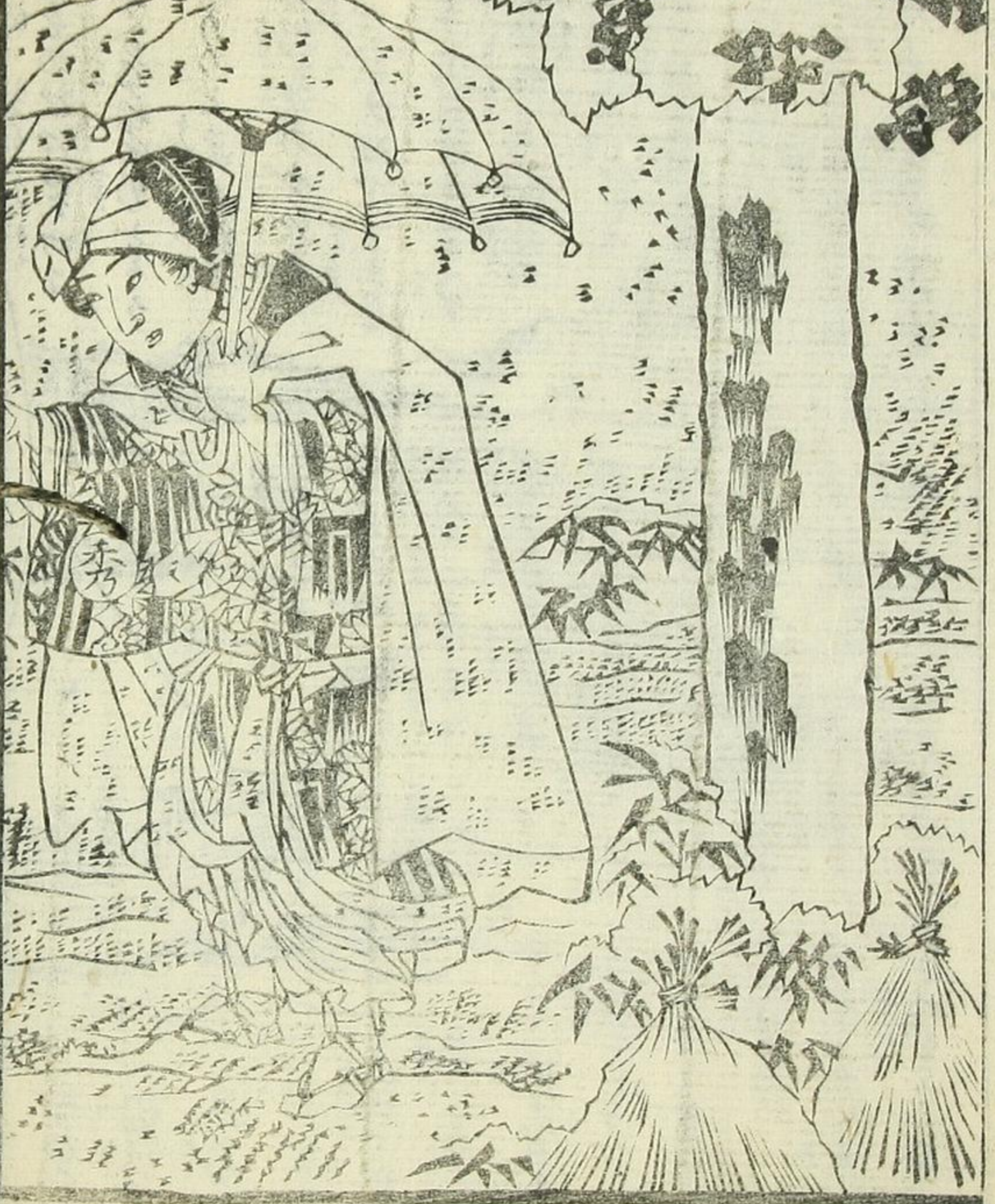
かひせせ
 る小糸せ
 その夜ハ
 七村と
 いふ知小
 泊り時が
 びの目五目と
 定より時一
 かく互ひ小
 助けられ
 二十六
 里の△



庚申塔

七田田の
 左法せ
 女がこ小
 松江の
 八都野所の文村
 としおやに流り

あ
 ちや
 葉の
 白人か
 若一
 久ねんで



景夕草下

景夕草下

二

九

けいさくは... ありきまのう... けいさくとして... 伸居のぬが... へ那西へ... 門前町の... 小麻が周旋...

編輯 篠田仙果
畫圖 子孟齋芳虎



二年と松... 一... の... 他... 私... ち... さ... 向... つ...

繪本 太豊記 三編

隅田川月梅若 四編

太閤記切附本 品 都逸なぞ切付

御届 神田區仲町一丁目六番地

明治十一年十二月十七日 編輯人 篠田久次郎

東地本錦繪問屋 日本橋區米沢町一丁目八番地 出版人 堤吉兵衛

010190510501

